

TO SA REHABILITATION COLLEGE

TOSAREHA

未来会



Contents

第21期生歓迎会のお知らせ

- 定期総会・勉強会日程
- 学術部からの“報告”と“お知らせ”
- 平成28年度 パラレルOT未来会活動報告
- 作業療法学科15期生の活動報告
- 新人(20期卒)からの一言
- 未来会会員の活躍
- 書籍の紹介
- らくらく連絡網への登録のお願い
- 未来会卒後研修センター
- 事務局だより

機 関 紙
NO. 19
2017. Spring

祝
21期生
卒業

これからも「未来会」の名に恥じぬよう
未来に向け、頑張っていきましょう！

21期生歓迎会のお知らせ

平成29年3月11日(土)、第21回目の卒業式が挙行されました。本年度は、理学療法学科41名、作業療法学科31名が卒業し、新たな人生の第一歩を歩み始めました。そこで、毎年恒例の新卒者歓迎会を下記の通り開催したいと思います。

当日は、歓迎会とともに、未来会総会と勉強会も開催しますので、皆さまお誘い合わせのうえ奮ってご参加ください！



【日時】平成29年4月8日(土) 19時～

【場所】土佐の一風

高知市はりまや町1-6-1
TEL 050-5280-0452

【会費】4,500円(21期生は無料)

同封の返信用ハガキにて、
3月25日(土)までに
出欠の返事をください。



定期総会・勉強会

【日 時】4月8日(土) 定期総会▶14:00～14:30 勉強会▶14:30～16:30

【場 所】土佐リハビリテーションカレッジ 講義棟3階 305中講義室

【テーマ・講師】『脳卒中後痙攣のリハビリテーション

～ボツリヌス治療を中心としたコンビネーションセラピーの世界～』

君浦 隆ノ介先生(PT3期卒:藍の都脳神経外科病院)

『ポバースコンセプトの視点をふまえた作業療法

～森之宮病院での取り組みをふまえて～』

稻富 悅一先生(OT15期卒:森之宮病院)

※なお、定期総会に出席できない可能性がある方は、返信はがきの委任状に署名・捺印をお願いします。

学術部からの“報告”と“お知らせ”

報告

平成28年度 未来会 高知支部 勉強会実績報告

平成28年度に未来会高知支部では、以下のような内容で勉強会を開催しました。今後も出来る限りこのような機会を増やし、未来会全体のレベルアップや交流につながればと考えています。

第1回 4月9日(土)	『中枢神経疾患者の歩行と上肢機能』 藤本彈先生(OT3期卒:総合病院回生病院)
第2回 6月29日(水)	『半側視空間無視の病態と患者管理に対するアプローチ』 國友晃先生(OT15期卒:愛宕病院)
第3回 9月7日(水)	『急性期脳卒中のリハビリテーション』 小川真輝先生(PT12期卒:高知大学医学部附属病院)
第4回 11月16日(水)	『認知症の理解と予防的観点からみえてくるもの』 中澤太志先生(OT16期卒:海辺の杜ホスピタル)
第5回 12月21日(水)	『脳卒中リハの予後予測の為に知っておきたい基礎知識』 那須勇太先生(PT16期卒:近森リハビリテーション病院)
第6回 2月1日(水)	『新人発表のプレ発表』 ①『両人工股関節破損し再置換を呈した症例を経験して』 富永沙英先生(PT20期卒:須崎くろしお病院) ②『深部静脈血栓症(DVT)に対しリスク管理と積極的な早期離床を行なった症例』 三谷幸平先生(PT20期卒:いづみの病院) ③『ラクナ梗塞を呈した症例歩容改善を目指して』 宮地悠平先生(PT20期卒:南国中央病院)



お知らせ

平成29年度 未来会 高知支部 勉強会計画案

平成29年度の勉強会の予定は以下のようになっています。また詳細が決定次第ご連絡いたします。もし「こんなテーマの勉強会がしたい」などの希望がありましたら、事務局までご一報ください。

第1回 4月8日(土)	『脳卒中後痙攣のリハビリテーション ～ボツリヌス治療を中心としたコンビネーションセラピーの世界～』 君浦隆ノ介先生(PT3期卒:藍の都脳神経外科病院)
第2回 6月予定	『ボバースコンセプトの視点をふまえた作業療法～森之宮病院での取り組みをふまえて～』 稻富惇一先生(OT15期卒:森之宮病院)
第3回 8月予定	『環境適応について(仮)』 山本学先生(OT 9期卒:近森病院)
第4回 10月予定	『在宅リハビリテーション』 橋本竜也先生(PT10期卒:内田脳神経外科)
第5回 12月予定	『精神領域の認知機能(仮)』 中越太一先生(OT16期卒:海辺の杜ホスピタル)
第6回 2月予定	『肥満と運動』 高橋みなみ先生(PT16期卒:高知大学医学部附属病院) (発表者:未定)

平成28年度 パラレルOT未来会活動報告

勉強会
趣旨

はじめに、昨年度までパラレルOT未来会を運営していた中澤先生から引き継ぎました土佐リハ17期卒業生の松木です。平成28年度より新たに20期卒業生も加わり、20名の大所帯になってきました。パラレルOTの趣旨は勉強会で知識・技術を共有し高めること、そして先輩・後輩・同期の繋がりを密にして盛り上げていくことです。宜しくお願い致します。今年度の活動内容を以下に報告致します。

平成
28年度
活動報告

【日 時】平成28年5月16日(月)19:00~20:30
【会 場】土佐リハビリテーションカレッジ 102機能訓練室

【テーマ】平面図を描く

【講 師】田中一理先生(OT15期卒:いづみの病院)

【内 容】家屋訪問に必要な基礎知識から物品や建具の記号など紹介していただきました。また、患者様のニーズにしっかり答えながら調整するのが大事ということ、チームアプローチの中に工務店も巻きこんで行うなど色々な職種の人達との連携が必要なことも改めてOTにしか出来ない事だと思いました。実際に平面図を描く練習もを行い、すぐに臨床に使える知識・技術を講義していただきました。



【テーマ】患者対応について ~ヘルピング・スキルを利用して~

【講 師】松木望先生(OT17期卒:細木ユニティ病院)

【内 容】今回パラレルOT勉強会で初めて講義させていただきました。患者様に対する接し方については身障・精神分野関係ないと思います。患者様の回復に向けてコミュニケーションを介してその人のニーズを引き出してあげるような関わりが必要であり、患者様が何に困っているのか?どうして対人関係が上手くいかないのか?など面接を通してその人自身に気づきを促すアクションを起こせるような質問方法や傾聴一つにしても「オウム返し」や「合いの手」などを意識して話をすると反応が違うことについて講義をしました。



【日 時】平成28年8月31日(水)19:00~20:30

【会 場】土佐リハビリテーションカレッジ 203評価治療室

【テーマ】嚥下障害を呈する患者へのアプローチ

～生体心理学の視点から食事動作を再考する～

【講 師】白石かおり先生(土佐リハビリテーションカレッジ)

【内 容】嚥下と姿勢の関係性だけではなく、視診からアプローチ方法まで講義と実技を含めて講義をしていただきました。徒手的に手指・腕・肩にアプローチしていき、道具の操作や自分の身体がしっかりと動いている感覚を覚えてもらい、実際の道具操作に繋げていくことの難しさを肌で感じることが出来ました。久しぶりに土佐リハで講義を受けている気分になりました。



平成29年度の
活動に
向けて

今年度は役割を引き継ぎ、私自身も戸惑いながらの出発になりましたが、箭野先生や前任の中澤先生をはじめ、パラレルOT未来会の運営委員に助けていただきながら運営する事が出来ました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。また、平成29年度も楽しく集まれる交流の場、まさしく「パラレル」のような場所を提供出来るように企画・運営していきたいと思っています。来年度の活動では、近年医療・福祉の制度面において診療等の細分化が進み、業務に追われる事が多くなっている中で、作業療法って?と疑問を持つ事も多いと思います。「私達作業療法士が作業療法士らしく働くにはどうすればいいのか?」という所をテーマに取り組んでいきたいと思っております。今後とも、どうぞ宜しくお願い致します。

報告者:松木望 (OT17期卒 細木ユニティ病院)

作業療法学科15期生の活動報告

OT 学科 15 期卒 稲富 悅一（森之宮病院）

皆さんこんにちは、作業療法学科15期生の稻富惇一です。今回、作業療法学科15期生の同窓会を『私達、入学式で出会って10年!』というテーマのもと、2016年12月30日（金）、ザ クラウンパレス新阪急高知にて開催しました。

参加者は、学生時代に担任を務めて下さった、百田貴洋先生、井上美和先生をお呼びし、合計17名が集まりました。17名もの人数が一度に集まつたのは在学中以来で、歓談の場では思い出話に花が咲き、終始笑い声にあふれていました。

歓談時間以外の内容としましては、まず各自の近況報告を行いました。職場で活躍している人や、結婚して家庭を築いている人など、様々な話が聞かれ、今まで以上にお互いを尊重し、刺激し合える場になったと思います。

次に、井上先生に作業療法士免許取得から現在までの歩みについて話をもらいました。井上先生の作業療法士人生では、様々な背景をもつた人との出会いがあり、それらを経て自分自身が成長してこれた、と話されていました。井上先生のように、『一生懸命』対象者の方や自分自身に向き合っていく。その積み重ねが対象者の方はもちろん、自分自身も良い方向へ導いていく、そう思わせて下さる内容でした。

終盤には、百田先生に『ICFと生きること』という題名のもと40分にわたる講義をしていただきました。百田先生は、私達が関わる対象者の方は病気などにより心身機能が影響を受け、日常生活や社会参加が阻害され『その人らしさ』が失われていることが多い。失われる原因である、病気もしくは心身機能の改善ができれば一番良い。しかし、それが難しい方も大勢いらっしゃる。その方々に自分達が何を提供できるのか、どう寄り添えるのか、しっかり考えてみてほしい。と話されていました。私達は人の人生に携わる仕事をしている。自分の関わり方次第で、対象者となる人の人生を“より”良くすることができる。目の前の出来事や現象ばかりに捉われるのではなく、その人の生きてこられた人生や背景をふまえて関わることが大切である、と改めて認識させて下さいました。

同窓会終了後には「楽しかった！久しぶりに皆に会えて良かった！」「次回も同窓会をやろう！」といった声が聞かれました。このような嬉しい声が上がったこともあり、15年、20年と節目の年に、次回同窓会を開催することができればと思っています。今回、惜しくも参加できなかった人もいました。残念です。次回開催時に、皆で集まれることを楽しみにしています。

最後に、同窓会の企画を相談した際に、快く了承と後押しをして下さった、竹林先生、箭野先生ありがとうございました。加えて、未来会より費用の一部を捻出していただいたこと深く感謝致します。また、何より同窓会を開催できたのは当日参加して下さった、百田先生、井上先生、作業療法学科15期生、皆様のおかげです。この場をお借りして心よりお礼申し上げます。



新人(20期卒)からの一言

1年間を振り返って

おかもと整形外科スポーツクリニック

坂本 拓則(PT学科 20期卒)

私は、スポーツリハの分野に興味があり、今現在広島県のおかもと整形外科スポーツクリニックで働いています。自分の夢であったスポーツリハの分野に進めた事により、自分自身にとってとても刺激のある毎日を送る事ができています。

私は、去年の春に新卒で入社し県外という慣れない環境で同期はいない、方言も違う、そして業務も覚える事だらけで入社した頃はできないなりにもがむしゃらに頑張っていました。最初は、課題もたくさんあり、家に帰って課題をしているとすぐ次の日を迎える毎日勉強の厳しい日々が続いていました。しかし、熱心に夜遅くまで病院に残り指導してくださる先輩方のおかげで毎日わからない事を少しずつ消化する事ができ、本当にきつい毎日でしたが、1年目を無事終える事ができました。

私は、臨床1年目で感じた事は実際に臨床の現場

では、教科書に書いてない事ばかりが目の前に症状として現れます。そういった時に解剖学、生理学、運動学を勉強するのはもちろんですが、何より大事なのは先輩方に分からない事はしっかり質問し、なぜこの人はこのような症状が出ているのかしっかりフィードバックをもらい1日1日理解を深めていく事がとても大事だと思います。色々な先生とフィードバックする事により様々な考え方を吸収できます。そうすれば少しずつ患者様にとって良い理学療法が提供できるようになってくると思います。

1年目はあっという間に終わりましたが、決して納得いく1年目ではなかったので2年目は1年目の反省点を生かし、患者様に笑顔になってもらうために全力で頑張っていきたいと思います。

そして、自分の夢、目標に向かって一歩ずつ突き進んでいきたいです。



この1年を振り返って

花の舎リハビリテーション病院 作業療法士

山本 望(旧姓:古味)(OT学科 20期卒)

この1年を振り返り、一番に思うことは『人生のタイミングポイントと思えることがたくさんあったな』ということです。クラスの皆と国家試験に向け勉強していた毎日がつい最近のことのように思えるほど、あっという間に過ぎていった1年でした。

入職後の院内研修では「働く心構えができるいるか」と聞かれ、資格を持って病院に立っているにも関わらず『まだできていない! 先延ばしにできるものならしたい!』と思ってしまう自分がいました。『患者様になんて失礼なことをしているんだ』と社会人としての自覚の低さを実感し恥ずかしくなりました。現在でも仕事に対する不安などはありますが、“患者様の生活に笑顔を届けられる作業療法士になりたい”と、職場で働いていく上での方向性を明確にできました。そのため、自分の行動にも責任を持ち仕事に取り組むことが出来ているのだと思います。それでも、仕事はうまくいかないとの連続で、自分に患者様の人生にかかわっていく資格があるのかと悩むことがあります。そんな時に同じ環境にいる同期と助け合えることが心の支えとなっています。また、先輩方は仕事内容だけでなく、私生活のことも快く相談に乗ってくださる先輩方ばかりで、栃木という慣れない地で生活をしている私は大変助かっています。

家族がかけがえのない存在であるということもより感じた1年でした。「元気にしゅうかえ?」「仕事はどう?」と電話をくれ、離れた場所でも他愛のない話を聞いてくれました。高知を離れたことを後悔してしまう日もありましたが、私の作業療法士としての成功を願っているのも家族であるということを感じることができた

ため、頑張ることができているのだと思います。患者様からは「ありがとう」「あなたに会えてよかった」と言ってくださることもあり『患者様に支えられている仕事なんだな』ということを改めて実感しています。

臨床に出てから、より『生活を見る』ということの難しさを感じています。専門家としての知識の少なさは経験を積んでいくしかない、という風に感じますが、“その方を理解していく”、ことに関しては何が正解かわからず模索をする日々です。ですが、悩みながらも患者様の話を聞く時間が仕事をしていて一番楽しいと感じる時間もあるということが、作業療法士の素晴らしいな、と感じています。今まで職場では一番下で、なんでも教えていただくばかりの受け身の多い立場でしたが、4月からは後輩も入職するため、より自分で考え、行動しなければなりません。先輩方から教えて頂いてきたことを活かしながら、これから臨床に挑んでいきたいと思います。



花の舎リハビリテーション病院 管理者と
(左:砂川先生 中央:山本 右:福富先生)

「未来会会員の活躍」

「大学院生活から学んだこと」

平成 28 年 5 月、6 年間在籍した高知大学大学院総合人間自然科学研究科の課程を修了し、博士（医学）の学位を取得しました。私が所属した教室は、土佐リハビリテーション名譽校長である瀬戸勝男先生が初代教授を務められた生理学教室で、瀬戸先生のお力添えもあり生理学教室 3 代目教授の梶秀人先生のもとでお世話になりました。大学院では、歩行のリハビリテーションの基礎研究という位置づけで、ヒトの周期運動におけるタイミングと力の制御特性に関して取り組みました。最終的には、「Takimoto K, et al.: Comparison of timing and force control of foot tapping between elderly and young subjects. J Phys Ther Sci 28: 1909-1915, 2016.」という形で論文発表に至りました（オープンアクセスなので、PubMed などでは是非ご覧ください）。大学院生活を振り返り思い出すのは、とにかく論文を検索・入手（有償の文献複写サービスで随分と教室にお世話になりました）して多読したこと、多くの学会で発表の機会を得たこと、中でも多くの方々との新たな出会いが一番の財産であると思っています。特に自分の専門領域とは異なる方々との接点は貴重でした。自分の取り組んでいることを大局的にみられるようになりさまざまな気づきを与えてくれたり、確実に知っていることと知らないこととの境界を明らかにしてくれたりと、例をあげるとキリがありません。また、巨人の肩の上に立つという言葉がありますが、巷には多くの先人の仕事

が丁寧に翻訳され（分かり易く紐解いてくれているという意）まとめられた書籍が少なくありません。このような書籍に頼ることは、初学者にとって有益なことかもしれません、自ら巨人の肩の上に立つこととは大きな乖離があります。翻訳書籍から得られる知識は、著者の信用を前提としたものであり、またその知識は背景にある多くの事実の中から価値があると判断されたごく一部のものに限定されています。自ら専門とする領域を追求するなら、自分で先人の仕事に触れに行くべきことを改めて思い知りました。

大学院生活を終えた私が今掲げる目標は、この研究活動のノウハウを活かして加速する高齢社会が抱える課題解決に貢献することと、後進の教育です。決して楽しいことばかりではありませんが、本気で汗をかいだ後のビールは相当美味しい！ということを、一人でも多くの仲間に伝えたいですね。



学位授与式の日に梶教授とともに

第42回中国四国リハビリテーション医学研究会 優秀発表賞

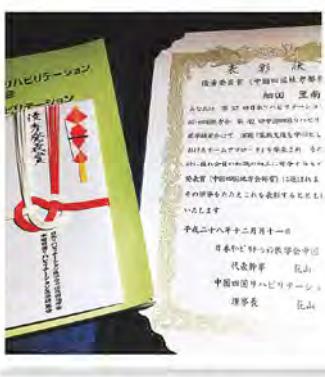


私は理学療法学科 2 期卒業で、現在、高知大学医学部附属病院に勤務しております。主に NICU で早産児の姿勢管理及びその後の発達フォローなど小児分野の

高知大学医学部附属病院
リハビリテーション科
技師長
細田 里南先生(PT学科2期卒)

理学療法を中心に関わっており、またリハビリテーション部の技師長として管理職業務も担っております。

このたび、脳腫瘍によって緩和期を迎えた患児とそのご家族への支援をまとめ、2016 年 6 月に開催された第 42 回中国四国リハビリテーション医学研究会にて発表した演題「家族支援を中心とした緩和期におけるチームアプローチ」で優秀発表賞（中国四国地方部会賞）をいただきました。今回の演題は症例報告で

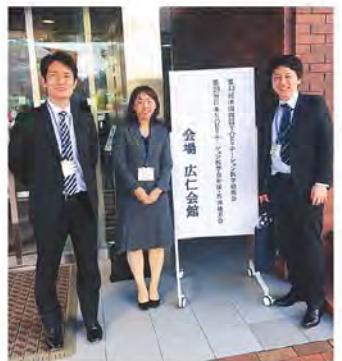


「患児に海を見てあげたい」という目標に向かって、家族支援専門看護師という全国でも希少な専門職とともに医師、看護師、ソーシャルワーカーや臨床工学士など多職種と連携して理学療法介入を行ないました。実際に介入した内容としては、呼吸理学療法やその一部である姿勢管理や移動手段の選択であり、何ら通常の理学療法とは変わらないものでした。ただ、一貫して全身状態が不安定である患児のご家族への支援として、一つの目標を共有することでそれぞれの専門職がチームの一員としてその能力を最大限に発揮すること

あり、脳腫瘍による遷延性意識障害を呈し人工呼吸器の離脱が困難な3歳患児のご家族が希望された「患児とともに家族で散歩をすること」「お世話になったICUスタッフに患児とともに御礼を伝えたい」

ができ、私も理学療法士としての専門性を提供することができました。

医療はチームで行うもの。当たり前のことではありますが、それを意識することで私たちリハ専門職の力はさらに發揮され、患者さんの可能性は拡大されます。今回の演題は、研究発表でもなく、大規模データを分析したものではありませんが、この研究会はリハビリテーションに関わる多職種で開催されていることもあります。受賞を通じて様々な職種にチームアプローチの重要性を認めていただいたと認識しております。今後もチーム医療の一員として活躍できるよう、理学療法士としてのスキルアップに努めてまいります。



第21回愛媛県理学療法士学会 新人賞



新人賞

平成28年3月13日に松山市の子規記念博物館にて行われた、第21回愛媛県理学療法士学会において「ギラン・バレー症候群の再燃による廃用症候群にて著しく機能低下した一症例～自宅復帰に向けた回復期病棟における低負荷運動

いる2METsボードを使用することで、ベッド上でも低負荷高頻度の運動が可能となり下肢筋力の向上、離床促進へ効果を示しました。また、歩行に関しては免荷式歩行器、歩行器、歩行車と段階的に進めていきました。免荷式歩行器を用いることで早期から歩行練習を開始することが可能であり、訓練初期でのリハビリ意欲の向上に繋がったと考えています。当初はADL全介助であった症例は移乗動作は見守り～自立で行え、歩行車を使用することで屋外歩行も可能となり自宅退院へと至りました。

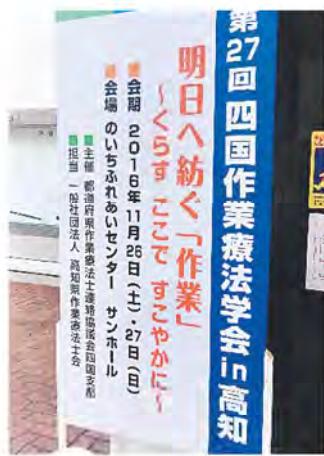
今回の発表が自分自身にとって初めての学会発表であり、発表の準備に際しては非常に時間を要して、お手伝いいただいた上司や先輩には大変お世話になりました。発表当日は非常に緊張しましたが、壇上に上がった後は堂々と発表できたように感じます。また、同年6月12日に行われた愛媛県理学療法士会通常総会の場で表彰をしていただき大変光栄に思います。最後に、今回の発表に携わって頂いた方々には大変感謝しています。今後も目の前の患者様のために自己研鑽に努めたいと思います。

からのアプローチ～」の題で発表し新人賞をいただきました。ギランバレー症候群の再燃を呈された症例に対してベッド上より積極的な運動を段階的に取り入れることで廃用症候群を予防し、ADLの向上及び歩行を再獲得し自宅復帰に至った為発表させて頂きました。発症当初は人工呼吸器管理が必要であった症例に対して、状態の安定した当院回復期病棟入院後は当院の先行研究（圧迫骨折症例への廃用予防）にて低負荷リハビリテーションスターターとしての意義を認めて

医療法人北辰会 西条市民病院
徳岡 勇人先生(PT学科19期卒)

第27回 四国作業療法学会 学会優秀賞 受賞コメント

社会医療法人財団大樹会
総合病院回生病院
リハビリテーション部 作業療法課
藤本 弾先生 (OT学科3期卒)



この度、第27回四国作業療法学会において学会優秀賞をいただきました。今年の四国作業療法学会は高知県野市町にある「のいちふれあいセンター」で開催されました。高知県開催ということもあり、多くの未来会員の皆様も参加され、学会実行委員や座長、発表等でも活躍されていました。この場をお借りしまして運営に携わられた会員の皆様に御礼申し上げます。

野市町というと（古い）未来会員の方にとっては懐かしく感じるのではないかでしょうか。私もできの悪かった学生時代のことを思い出しました。当時のことを考えると、このような賞をいただけるとは想像もしていませんでした。これも、常日頃からご指導いただいている諸先生方、日々の勉強会で一緒に切磋琢磨している先生方、ならびに当院リハビリテーション部のスタッフの皆様のおかげであると身に染みて感じております。

さて、私は土佐リハビリテーションカレッジを卒業後、山梨県にある石和温泉病院に就職しました。そこで、Bobath Concept・活動分析・環境適応に出会い、これらをベースに脳血管疾患者のリハビリテーションに取り組んでいます。地元である香川県に帰ってからは周囲の環境が変わりましたが、活動を継続するため、箭野豊先生（土佐リハビリテーションカレッジ教員）、

片岡聰子先生（土佐リハビリテーションカレッジ教員）と土佐リハビリテーションカレッジ（当時はまだ山北キャンパスでした）をお借りして勉強会を行ってきました。最初は3人で始めた勉強会でしたが、今では「高知県活動分析研究会」となり、未来会員も含めて多くの方が参加する会となっています。

今回の私の発表は「歩容の改善に向けて～上肢から下肢機能を考える～」という内容でした。OTなのに歩行？と思われるかもしれません。しかし、この方は上肢に生じている問題も、下肢に生じている問題も共通していました。そこには中枢神経系の問題が生じているものと推察されたため、上肢から活動（activity）を用いて関わったところ歩容も改善しました。全身反応をみながら中枢神経系に関わる必要性を感じた瞬間でした。思い返せば今年度、4月に開催された未来会の勉強会でお話しさせていただいた際のテーマも「中



枢神経患者の歩行と上肢機能」でした。また、他の講習会でのテーマも、歩行や下肢機能と上肢機能に関わるものでした。このように1年間を振り返ると「上肢機能↔下肢機能」について考えを深めた年でした。考えれば考えるほど共通点や関連性も深く興味深いため、来年度も引き続き全身反応をみていくよう、臨床力を高めていければと考えております。

IASP 16th World Congress on Painに参加して

昨年の9月26日～30日に横浜で開催されたIASP 16th World Congress on Painに参加してきました。私自身、国際学会で発表することは初めてであり、参加するまでは不安ばかりでした。前日も質問の対策を考えていたら外が明るくなり朝になっていたことを覚えています。発表の時間になると多くの方が質問に来てくれ、非常に有意義な時間となりました。英語は苦手ですが、向こうの方が私の英語力を察してくれたようでわかりやすいように話してくれ何とかなりました（汗）。国際学会はちょっと……と思う方が多いと思いますが、一度行くとまた行ってみたいきっと思えます！今回は、国内の開催だったので、楽しみは中華街でしたが次の機会は海外での参加にチャレンジしてみたいと思います。

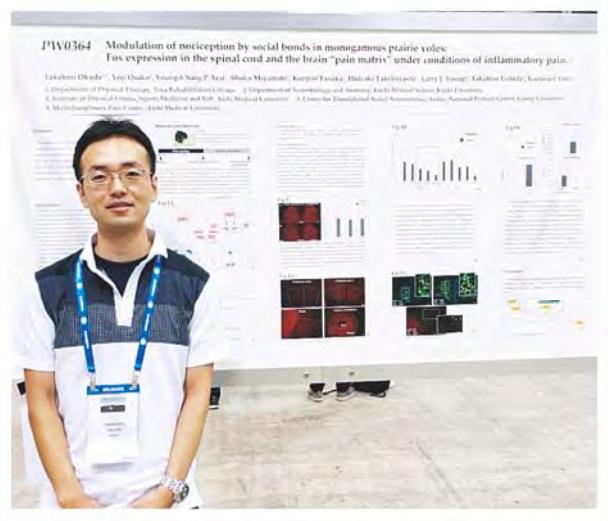
少しだけ今回の発表内容を紹介したいと思います。演題は「Modulation of nociception by social bonds in monogamous prairie voles: Fos expression in the spinal cord and the brain “pain matrix” under conditions of inflammatory pain」であり、プレーリーハタネズミという高社会性を築き人間の夫婦関係に似た絆を形成する動物モデルを用いた発表を行いました。プレーリーハタネズミとは、一般的なマ

来年度の四国作業療法学会は平成30年1月13日～14日に徳島県のあわぎんホールで開催されます。学会の準備も進んでいますが、私も発表に向けて準備を進めています。徳島で皆様と会えることを楽しみにしています。

土佐リハビリテーションカレッジ
理学療法学科
奥田 教宏先生 (PT学科9期卒)

ウスやラットと違い一夫一婦制の社会を形成する動物であり、人間社会と非常に近い社会環境であると言われています。パートナーと一度絆を形成させた後にパートナーと離別させる群と同居を継続させる群に一定期間分け、その後侵害刺激を与えることにより痛みの反応性が脊髄と脳でどのように変化するか検討をしました。結果は、パートナーと同居を継続した群が、脊髄後角の反応性が減少し、脳の活動性は亢進していました。脳の活動性では、オキシトシン・バソプレシン・ドーパミンの活動性も検討しており、今回オキシトシンの影響が強く、下行性疼痛制御系にオキシトシンが関与している可能性が考えられました。

初めは、ネズミの扱い方すらわからず苦労したこともありましたが、今では基礎研究の基本となることは一定できるようになり、基礎研究の面白さにも触れることができた一年半でした。未来会の機関紙に掲載される先生方を見ていると「自分ももっともっと頑張らない」と思います。これからも新しいことにチャレンジして同期や先輩方、後輩達に負けないよう自己研鑽していきたいと思います！



「回復期リハビリテーション病棟協会 第27回研究大会（沖縄）での発表を経験して」

株式会社セラピット
訪問看護ステーション リハ・リハ
山本 洋輝先生（OT学科15期卒）
(発表当時の職場：山梨リハビリテーション病院)



平成28年3月4、5日の2日間、沖縄県宜野湾市にある沖縄コンベンションセンターにて開催された、回復期リハビリテーション病棟協会 第27回研究大会（以下；研究大会）にて、「当院の男性向け集団的個別作業療法の効果～Mini Mental State Examination 下位項目による分析～」という題目で、6分間のポスター発表を行いました。研究大会には北海道から沖縄まで日本全国より約2,000名の方々が参加されたそうです。簡単ですが、研究大会の様子について私の感想を交えながら報告させて頂きます。

私が参加した研究大会は、回復期リハビリテーション病棟協会が主催しており、回復期リハビリテーション病棟の質的向上を図り、当該医療の発展に寄与することを目的とした研究大会です。今研究大会では、大会長である医療法人タピック沖縄リハビリテーションセンター病院 理事長 宮里好一様の講演を始め、多岐にわたる講演が行われた他に、283題もの口述発表と522題のポスター発表が行われました。

今回、初めてのポスター発表ということもあり、



原稿作成からポスター作製までと苦労しましたが、当時の職場の上司や仲間の支えのおかげで、何とか発表へ至ることが出来ました。また、職場内での予演会では自分が行ってきた研究をシンプルに分かりやすく相手へ伝えることのむずかしさを痛感した為、発表当日は「やってきた内容を素直に伝える」ことを意識して発表に臨みました。

当日は、座長（医師）が私の発表内容について興味を示してください、事前に研究内容等についてコミュニケーションを図ることが出来ていたこともあり、少し落ち着いて発表に臨めました。また、質疑応答では発表者－聴講者が話しやすい雰囲気を作つて頂けたことで他施設・他職種の方々と多くの情報交換を図ることが出来ました。

発表終了後もたくさんの方からアドバイスを頂きました。内容としては、「男性の集団レクリエーションを行いたいが、施設が認めてくれない」や、「男性は、集団レクリエーションへ参加してくれない」等といった声が多く聞かれました。しかし、実際に運営した男性向けの集団プログラムにおける男性患者への配慮点や運営の工夫点を伝える中で、「現場へ戻ったら取り入れてみます」といった前向きな反応を受けたことは、発表した甲斐があったと感じた一場面でした。

この研究大会では、研究の発表を行うだけではなく、全国の医師・看護師・作業療法士・理学療法士・言語聴覚士・薬剤師・栄養士等の他職種が集まる為、多種多様な発表を聞くことができ、日々の臨床場面へ繋げる良いアイデアを多く発見することができました。

最後になりますが、どの職場でも、どの時期で働いていても、目の前にいる対象者のために、自分にできることを追求・提供することは変わらないと思いますので、このような研究大会等に参加することは今後も継続していくべきだと感じます。



災害医療 DMAT研修

田野病院 DMAT 隊員

森下 誠也先生 (PT学科6期卒)



私は理学療法学科第6期卒業生の森下誠也（写真2列目右）です。2015年に日本DMAT隊員養成研修を終了し、2016年から田野病院DMAT隊員となりました。私が災害医療に興味を持つきっかけとなったのは、東日本大震災での日本理学療法士協会からの派遣依頼でした。派遣された時期は発災から約1ヶ月が経過していましたが、現地の情報やリハビリテーションニーズに関しての情報が十分ではありませんでした。また活動期間も1週間程度と短く、活動内容に関しても手探りの状態でした。

DMATについては「DMAT=最前線で診断・治療をする」というイメージを持たれている方も多いと思いますが、それだけではなく、災害の起きた地域や病院での支援活動が円滑に行えるための組織を組み立てることの方が重要です。

DMATにおける私の役割は業務調整員と呼ばれるもので、主に情報収集や伝達、活動記録、DMAT隊員の環境整備などを行い、理学療法士以外にも薬剤師や臨床工学技師、臨床検査技師など医師・看護師以外のあらゆる職種の方々がいます。そのため理学療法士としての知識はほとんど使うことはありませんが、DMAT全体が円滑に活動出来るかどうかは業務調整員の手にかかっていると言っても過言ではありません。

DMAT隊員になるには4日間の研修と試験を受ける必要があります。私の所属する田野病院では最初のチームであったため、研修までに業務終了後みんなで集まって、現場の写真を見ながら簡潔に状況報告をする、模擬患者さんのトリアージをするといった勉強会を行いました。

研修当日は12月で、研修場所である兵庫県災害医

療センターの近くに宿泊し、日中は研修、夜は帰って日付が変わるもので復習と予習をひたすら行いました。研修終了後無事に合格した時には、国家試験合格の時と同じくらいの安堵感と同時に、これから招集がかかった時には現場に行かなければならないかもしれないという使命感を感じました。DMAT隊員の資格は5年更新制で、年に数回行われる技能維持訓練を受講していく必要があります。つまり、「DMATとして活動していく気持ちが無くなるまで」が資格を保有する期間であるとも言えます。

先日は屋外にて医療モジュールと呼ばれる簡易的な集中治療室を展開しての実動訓練が朝早くから夕方遅くまでありました。実際の場面はどのような状況になるかは分らないため、これからもあらゆる状況を想定した実動訓練を経験していかなくてはなりません。

DMAT隊員になってもうすぐ1年になります。まだ現場での活動経験はありませんが、災害に対する意識は確実に変わりました。DMATは実績や実力のある病院や隊員から順に要請があります。現状ではまだですが、多くの訓練を積み重ね、要請を受けることができるよう努力していきたいと思います。そして現地の情報をまとめ、日本理学療法士協会やJRATとの連携が円滑に進むような活動ができれば、DMATにいる理学療法士の役割にもなるのではないかと思っています。



大学院で学んだこと

福岡大学病院

福田 宏幸先生(PT学科10期卒)

土佐リハビリテーションカレッジ、人間総合科学大学を卒業後、福岡大学病院に入職しました。

急性期病院は入院期間が短く、日々身の回りの環境が目まぐるしく変化していきます。

そんな中、病気によって人生が大きく変化した患者さんの治療にあたってきました。

患者さんは自分の体を治すため必死に病院を探します。病院を選択する上でリハビリも最も重要な1つとして考えられています。患者さんの思いに応えるため、最新の医療を学びたいと思い、入職8年目に福岡大学大学院医学研究科病態構造系専攻の博士課程に入学することを決意しました。

当院はHAL(Hybrid Assistive Limb)を導入しており、HALによるリハビリテーションの効果の研究を進めていきたいと思いました。大学院在学中の研究内容は急性期脳卒中患者に複数タイプのロボットスツ (単関節タイプ、両脚型、单脚型)を使用したテラーメイドリハビリテーションの有効性を評価することを本研究の目的とし、複数タイプのロボットを使用した Multiple-Robot Rehabilitation の有効性を示すため、単一のロボット (両脚型)のみを使用したリハビリテーション Single-Robot Rehabilitation を受けた患者を対照として機能的予後の比較を行いました。

結果、単関節タイプの使用により上肢の運動麻痺が使用しない群と比べて大きな改善度合いを示し、複数ロボットを状況に合わせて使用することによるADLのより良好な改善を得ることができました。この論文はAssistive Technologyにacceptされました。そして、平成28年3月に医学博士を修得しました。研究を進めていくために病院への信頼、医師・看護師の協力、患者さんとの信頼関係、家族の協力が大切であると感じました。また、研究は臨床の成績を上げるのではないかとも感じています。

今後もHALによるロボットリハビリテーションの効果が科学的に証明できるように研究を進めていきたいと思います。

度 福岡大学大学院学位記



書籍紹介

丸太町リハビリテーションクリニック

松井 知之 (PT学科3期卒)



実践! 動作分析

この度、医歯薬出版株式会社から出版されました「実践! 動作分析」を分担執筆させていただきました。

学生の皆さんや、若いセラピストの先生は、「動作分析」に苦手意識を持っていないでしょうか? 動作分析によって、問題点を抽出するには、解剖学、運動学、運動生理学的な知識を総動員し、かつ各疾患の病態を理解する必要が

あります。またバイオメカニクス、各種動作特性の理解も必要です。このように言われると、「難しい」、「苦手」という声が聞こえてきそうですが、実は動作分析に必要な知識は、十分皆さんお持ちのはずです。重要な事は、各動作を分析する「ポイント」が分からぬだけです。どの時期にどの動き(関節)を見れば良いのか、それさえ分かれば動作分析は簡単です。

本書は、写真や図をたくさん用いて、起き上がり、立ち上がり、歩行など基本動作の見方を簡単なバイオメカニクスの観点から説明しています。また運動器から中枢疾患まで幅広く、実際の症例を提示し、分析のポイントやよく認める代償動作、またその理由を解説しています。

皆さんにとって、動作分析の苦手意識をなくす一助になれば幸いです。

脳卒中理学療法の理論と技術

改定第2版 IV理学療法と理学療法

「脳卒中後痙攣のボツリヌス治療と理学療法」を担当執筆



本書は、脳卒中リハビリテーションの先駆者であるリハビリテーション医の原寛美先生と吉尾雅春先生のダブルネームが編著を務め、今を時めくヒグナム達が名を連ねている脳卒中リハビリテーションに関わる医療従事者なら必携の1冊です。

私は今回「脳卒中後痙攣のボツリヌス治療と理学療法」について執筆させていただきました。英国のガイドラインでは、ボツリヌス治療がリハビリテーションの一部とされ、運動療法、物理療法などと同列とされています。ボツリヌス治療をはじめとする脳卒中後痙攣治療は、複雑なため患者と医師のみで施行する

のではなく、ご家族、看護師、療法士（生活期担当がいる場合はその担当者も含む）、検査技師、薬剤師、ケアワーカー、ケアマネージャーが協力し、チームで行うものとされています。その他の欧米諸国でも、ボツリヌス治療は当然のように行われ、脳卒中リハビリテーションに携わる医療従事者の中では無くてはならない治療技術の一つとされ、いずれ先進諸国においてもグレードA（強く勧める）で紹介されています。

しかし、日本においてのボツリヌス治療は完成度が低く、チーム体制すらできていないことが多い。そこで、痙攣治療への療法士の関わり方を中心にボツリヌス治療と併用していただきたい理学療法の理論と技術についても含め、今回執筆させていただきました。

2025年に「世界は2人に1人が脳卒中という時代が到来する。」とされています。2025年の世界人口は約80億人とされ、脳卒中後痙攣患者は約16億人に到達します。



これは最も人口が多いとされる中国の人口を約2億人以上も上回る計算です。高知県は2020年頃から超高齢化が始まります。この問題に直面している高知県の療法士の皆様には、この本をきっかけに痙攣治療に少しでも興味を持ち超高齢化問題への備えとなれば幸いです。

らくらく連絡網への登録のお願い



未来会では、数年前より「未来会会員の連絡網」を作成しております。連絡網の手段として、無料のメーリングリストサービスである「らくらく連絡網」を利用させて頂いています。出来るだけ多くの卒業生に登録してもらい、色々な情報の発信を考えております。まだ登録されていない方は、以下の手続き方法を確認の上、手続きを行ってください。出来るだけ多くの卒業生に協力頂けると幸いです。

以上、大変お忙しいところお手数をお掛けしますが、よろしくお願いします。

《対象》 全会員 (PT / OT・県内外問わず、1 ~ 21期までの卒業生全員)

《方法》

未来会 PT 登録用のアドレス 16234137@ra9.jp

▼① 空メールを送信する。

未来会 OT 登録用のアドレス 16388898@ra9.jp

* PT / OT で送信するアドレスが違うのでご注意ください！ ⇒ 空メール送信後、直ぐに「らくらく連絡網」から返信が届きます。

▼② 返信してきたメールの指示に従い、手続きをおこなう。

返信メールの本文内に掲載されている URL をクリックし、画面下にある“同意する”をクリックしてください。その後、メールアドレスや氏名（フリガナ）、性別、所属（病院・施設名）、電話番号、生年月日等の必要事項を記入して頂く必要があります。必要事項が記入できましたら、“登録”をクリックしてください。登録ボタンクリック後、登録手続き完了の画面になりましたら、その画面は閉じて頂いて構いません。

▼③ 再び「らくらく連絡網」からの返信（「メンバー登録完了」の旨）を確認する。

「メンバー登録完了」の返信メールは1~7日かかる場合があります。「メンバー登録完了」の返信に記載されている個人専用のページのアドレスをブックマーク登録しておくと、今後便利です。

注) いずれの手続きも、PC からも携帯電話からも行えます。しかし、携帯電話・スマートフォンで行う場合、PC からのメールを拒否設定している方はそれを解除してもらう必要があります。

もちろん、上記連絡網は未来会の活動に関する連絡事項通知すること以外の使用目的で使用することはできません。

* らくらく連絡網について詳しく知りたい方はホームページ (<http://www.ra9.jp/>) をご参照ください。

* 無料の ML を使用しているので、各種広告メールが添付されていることがあります、ご了承ください。

未来会卒後研修センター

会員が未来に向けて飛躍するために数年前より卒後研修センターを立ち上げて、研究・研修・学習などの学術活動への支援をしています。

學習支援

- 講義棟4階の卒後研修センターでは、未来会で購入したPCと複合機を設置しています。これらを利用した文献の検索やコピーを無料で行えます（利用に際しては、必ず土佐リハ教員の許可を得てください）。
 - 卒後研修センターで保管する図書（卒業生が執筆した）やDVDなどのメディアを徐々に充実させていきます。

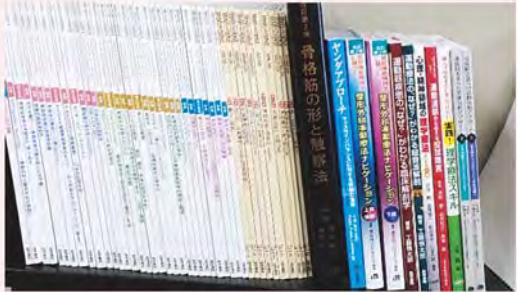
文献検索 : Medical Finder のサイト

PT ジャーナル、総合リハビリテーション、BRAIN and NERVEなどの文献は、USB キー Medical Finder のサイトより PDF 形式で文献ファイル (pdf) をダウンロードできます。

注目 LAN HDD を使用した文献データや動画ファイルの共有化について

以前、LAN HDD のシステムを使用していましたが、故障に伴い使用できずにいました。今回新たにシステムを構築しました。これは、インターネット環境があれば、指定するサイトから未来会員専用のパスワードを用いてログインすることにより、場所を問わず論文や動画データを閲覧することができます。

使用を希望する場合は、下記の事務局メールまで連絡してください。



事務局だより

住所変更届、会費納入のお願い

この度、同窓会機関紙第19号を発行することができました。同窓会として、このような会報誌を会員の皆様にお届けすることで、母校を懐かしんでいただき、更には母校の発展、会員の親睦に繋がればと考えております。そこで、同窓会活動の活性化、より内容の充実した会報を皆様にお届けする為に、会員の皆様に会費2万円（一度のみ）のご協力をお願いを申し上げます。6期生以前の卒業生は、振込みでお願いしているため、まだ納入していない方がいます。右記の振込先までお願いします。7期生以降の卒業生は、ほぼ全員卒業時に入金頂いています。自分が納入済かどうかは、未来会事務局まで問い合わせください。

より充実した同窓会の運営、母校発展、会員の親睦のために、ご理解いただきますよう宜しくお願ひ申し上げます。

振込先：ゆうちょ銀行

記号: 16470 番号: 12022261

名 義：土佐リハビリテーションカレッジ同窓会「未来会」

今後の同窓会活動に関しては、皆様からのご意見を頂戴し、検討をしていきたいと考えています。また、職場の異動などがありましたら、未来会事務局までご連絡ください。

連絡先メール miraikai@tosareha.ac.jp